灯台と小さな天体

時針と分針の光点が部屋を回る時計

時計の中心の灯台みたいな光源から
光点がくるくる室内を揺蕩う

時間という概念が少しずつ空間と身体に内在化していって
次第に文字盤を見ることは無くなる

朝の 8 時には床の隅を光点が滑り
昼の 12 時には天井を通って
夜の 10 時には窓を掠める

小さな天体を観察するみたいな
そんな時間の在り方